

保育らくおが

福岡市長 高島 宗一郎 氏 書

編集・発行 一般社団法人福岡市保育協会 福岡市中央区荒戸3丁目3-39 福岡市市民福祉プラザ6F 発行者 増本 律秀 編集者 有松 徹



「そばにいるからね」
星の原団地保育園 金納 芳枝 先生



「いないいないばあっ!」
光應寺保育園 佐々木 真紀子 先生

2023ちびっこあつまれ! みんなのえがお展



「天の川、渡ったね」
まことながすみ保育園 小林 綾子 先生



「おもしろいかお〜!」
はこざき保育園 甲斐 綾乃 先生



「夏!空!水!笑顔!」
きりん保育園 百田 亜紀 先生

vol.131 令和5年度 2号

九州保育三団体の報告	2	保育協会青年部の取り組み・PR	6
養成校との関わり	3	保育研究大会のみどころ	7
こども誰でも通園制度	4	私の園の取り組み	8
令和5年度福岡市保育協会就職フェア	5	編集後記	8



九州保育三団体の報告

第7回九州保育三団体研究大会福岡市大会が、去る令和5年8月31日（木）・9月1日（金）の二日間に行われ、アクロス福岡及びホテルオークラ福岡を会場として開催されました。

この大会は新型コロナウイルス感染症の流行によって、中止となっていました。が、実に4年ぶりに開催の運びとなりました。

大会初日のオープニングでは、精華女子高等学校吹奏楽部のステージマーチングショーで華々しく開会し、開会の式典では福岡市荒瀬副市長ほか、多くの来賓の方々より祝辞を賜りました。

初日の内容としては、まず基調講演で、こども家庭庁成育局保育政策課公定価格担当室の齊藤克也室長に、保育行政の動向と課題について、こども家庭庁発足の重要性を踏まえながらお話しいただき、また九州ブロック保育士会セミナーでは、『妊娠期からつながる乳幼児ケアの重要性』と題して、保育現場が子どもと家族の『安心・安全の基地』であるためにはどのようなことが重要であるかを、鎌倉女子大学児童学部児童学科の榎原久子准教授にご講演いただきました。

会場をホテルオークラ福岡に移しての交流会では、乾杯前のオープニングパフォーマンスで、地元福岡市出身のなかやまきんに君のトークパフォーマンスで、初めから最高潮に達し、「パワー！」な乾杯から、九州各地から持

ち寄っていただいた銘酒の飲み比べや、博多券番の芸妓の方々による博多の伝統芸能を楽しんでいただきながら、楽しい交流会となりました。終わりに、こちらも福岡市出身の森口博子さんが、歌とトークを交えながら、会を盛り上げていただき、参加者同士の親睦を深めることができました。

大会2日目は、午前中に「子どもの育ちを保障する」「子育てを家庭を支える」「多様な連携と協働をつくる」「子育て文化を育む」「子育て・子育て支援する仕組みをつくる」という5つのカテゴリーを基に、8つの分科会が開催されました。各分科会では、九州各地区からそれぞれがテーマを決めて保育発表があり、その実情に応じた様々な取組みに対し、参加者との意見交換が行われ、日頃の保育を振り返る意義深い時間となりました。

午後の記念講演では、(株)愛しとーと代表取締役兼CEOの岩本初恵氏に『ポジティブ転換のコツ』について、ご本人の幼少期の話や、お父様からの教え、そして我が子を褒めて育てた話など、たくさんのお話を聴かせていただきました。特に印象に残った言葉が、「人生に無駄はない」「自分が変われば周りが変わり人生が変わる」という言葉でした。最後に、来場者の「はっちゃくん」の呼びかけに「愛しとー」と、満面の笑顔で応えてありました。

記念講演後の総会にて、分科会での報告と今大会の大会宣言の採択と朗読が行われ、それに引き続き行われた閉会式では、次期開催地の熊本県より、くまモンがサプライズゲストとして登

場し、次期大会のPRを盛り上げてくれました。こうして2日間にわたって行われた大会も無事に閉会することができました。

今大会は、昨年の7月より実行委員会が立ち上げられ、実行委員長増本律秀先生（城浜保育園）、副実行委員長高田史敬先生（田島保育園）を中心に、およそ1年にわたって準備をしてきました。コロナ禍で見通しがつかない中ではありましたが、各部がそれぞれアイデアを出し合いながら、最終的には1200名を超える保育関係者が参加し、大盛況のうちに終了することができました。関係者の皆さまの温かい励ましとご協力に心よりお礼を申し上げます。

（機関紙編集委員 楠野 吉弥）



▲精華女子高等学校吹奏楽部のステージマーチング



◀開会式

▼次期開催地熊本県からくまモンが応援に！



▲岩本初恵さんによる記念講演



▲なかやまきんに君のパフォーマンス

◀博多券番の芸妓さんたち

養成校との関わり

福岡市保育協会の広報調査部では、各委員が、6月から8月にかけて市内及び福岡市近郊の保育士養成施設を訪問し、学生さんへ保育という仕事の魅力を伝えたり、保育園への就職について説明しています。また、その時に養成校の担当者と情報交換をさせていただいています。それに加えて、毎年8月に保育士養成校や行政との意見交換会を実施していますが、今年度は20校から24名の教授や准教授、就職担当の先生方にお越しいただくことができました。当日は4グループに分かれ、「保育者としてのやりがいや希望の増幅につながる協働的な『実習指導』のあり方を考える」、「豊かな実践力を育む保育者養成教育における協働的な『授業づくり』のあり方を考える」、「選ばれる保育園づくりと人材の定着率安定につながる協働的な『就職支援』のあり方を考える」、「理論と実践の往還を可能とする協働的な『研修づくり』のあり方を考える」という、それぞれのテーマに沿って、養成校、行政、保育園の三者で様々な意見や考えを出し合いました。それぞれの現場で感じていることや現状、課題をしっかり話し合うことができるため、貴重な時間となっています。

具体的には以下のような意見が各グループより出ました。

- ・自由に園を見学できる期間を設けていただいて、各養成校に周知するような形を取っていただくことはできないか。
- ・数年のキャリアを経ての研修を実施する等、就職後に振り返る時間を設けたり、情報をアップデートする研修が必要だと思う。
- ・高知県では行政が主体となって公開保育を行っている。その際に、市が手配したアドバイザーが帯同して説明や助言を行いながら公開保育を進めている。福岡市でもそのような形で公開保育をしていたら嬉しい。
- ・保育業界にもインターンシップという文化を取り入れる必要がある。養成校と一緒に取り組めたら良いなと思う。
- ・学校で学んだことを在学中に実践の場として活かす機会を学生に多く提供することを重視している。今後、園側にボランティアをはじめ、実習以外で学生が現場で実践力が培えるような提案等あれば相談してほしい。養成校としても園との関わりを実習や就職内定以外でも増やしていければと考えている。
- ・昔と比べて子育ての問題を保育園や保育士が担っており、社会で子育てと言いつつ、実際には保育園の負担が大きい形となっている。もう少し社会の中で専門的に分担し、保育士の負担を減らさなければ、本当の意味での保育士育成は難しいと思う。実習日誌の形式や捉え方も各養成校で違うので、統一していただけたら

- ・園側としてはとても助かる。また、そこまで重要ではない部分は簡略化していくということも必要なのではないか。
- ・実習日誌は、時系列を書き綴る形ではなく、テーマを決めてそのテーマに沿ってのエピソードや感想を記録して欲しい旨を学生に伝えている。
- ・実習等で、現場の先生方からちよつとした声かけをしてもらえたり、一言でも添えてもらえると不安感は軽減される。
- ・昼寝の時間等、実習時間内に日誌を記入する時間を確保してもらえないのは有り難い。
- ・保育士同士、子どもや保護者に関するネガティブな発言を実習生の前でないでほしい。
- ・実習中に保育士の子どもへの関わりを見てショックを受け、不適切保育に敏感になったり、職場の人間関係が見える等、就職をためらう学生がいる。
- ・実習中に強引に面接や採用に持つていくのはやめてほしい。
- ・職場の語り合いが多い園は、保育の質が高い傾向にある。職場の人間関係は大事。
- ・昔は学生から先生に気軽に相談に来ていたが、今の学生は自ら相談に来るといふことが減ってきている。
- ・挨拶、目上の人への言葉遣い等、基本的なマナーを身に付けるため、今年度よりマナーに関する授業を組み込んでいる。
- ・内定を受けたら辞退することは控えてほしい。次年度の人事に影響する。

- ・人材紹介会社を利用しないように学生に周知してほしい。
- ・養成校の入学生の確保がさらに厳しくなっている。

このように養成校への訪問や意見交換会を実施する中で様々な気づきがありました。少子化に伴う学生の減少に対しては、養成校、保育園共にかんがりの危機感を持っていました。未来の保育士が減少していくということは質の低下に直結する問題です。その中で、養成校や行政と協働しながら裾野を広げていく必要があるということだと思います。思いは一致しています。そのためにも、保育という仕事の魅力や、やりがいをもっとアピールしていかなければなりません。保育士という仕事の社会的地位を上げていかなければなりません。そう考えると、我々保育園側も変えるべきところは変えていかなければならないということでしょう。

(機関紙編集委員 高木 禎晋)



『こども誰でも通園制度』に向けた取り組みとは？
福岡市におけるモデル事業
『定期的な預かり保育事業』実施園インタビュー

中比恵ソレイユガーデン保育園(博多区)春田雅孝園長

本年度8月1日から始まった『定期的な預かり保育事業』。福岡市内の3園がモデル園として選ばれ、2ヶ月ほどの準備期間のちにスタートしました。高島市長の会見でも話題になったように、注目度が高く多くの関係者の関心を集めました。その実情はあまり知られていないようです。今回、モデル園のひとつである中比恵ソレイユガーデン保育園の春田園長先生にお話をうかがうことができました。

◆今回のモデル園に手を挙げた理由は？

こどももみんなが社会の新規事業として国が『こども誰でも通園制度』を示しました。これから定着していく制度かもしれないと思い、保育園の多機能化として園運営に取り入れていくと考えたときにモデル園になっておくことは後々役に立つと考えました。また、月に一回園で行っている子育て支援サークルの保護者の皆さんと話をすることで、家庭養育の支援の必要性も感じていました。その他、予算運営管理部長の立場からも、保育協会加盟園に報告する等の協力ができないかと思っていました。

◆福岡市が行う『定期的な預かり保育事業』とはどんな制度ですか？

空き部屋などがある場合の『一般型』と、空き定員がある場合の『余裕活用型』の2パターンがあり、当園は

一般型として実施しています。現在、選考された37名の園児が週1〜2回通園しますが、1日の定員が10名なので月々土で週最大延べ60名を預かることができます。保護者の費用は一日給食費などの全ての費用を含み1、000円と決まっております。登園時に支払っていただいています。

◆開始時の申し込みや現在の利用状況は？

6月12日から保護者の申し込みが始まったんですが、テレビなどで大きく報道されたため160件もの見学があり、130名の応募がありました。すべての方と面接する必要があったため、選考作業には時間と労力を要しましたね。現在は週で40数人程度の利用があり、開始から3ヶ月ほどたつてきて、園児の様子も落ち着いてきたと思います。

◆どのような保護者が利用されていますか？

現在休職中の方や育児休暇中の方が多いですね。週1回程度の定期的な預かりが条件で、年度末までの利用ができる方ではないと申し込みにならないです。また、園には発達支援も行うよう義務付けられており、書類は毎日の連絡ノート、月案、発達経過記録を作成し、年3回の面談も必要要件になっています。

◆この事業を始めてみてわかったことは何ですか？

食事での苦労が思った以上にありました。集団生活に慣れていない子どもたちなので、おもちゃで遊ばなかったり、友だちとのコミュニケーションが難しかったり、在園児と比べると登園数の少なさのために適応に時間がかかるんだと思います。お外遊びの時等に在園児のお友だちと交わることもありますが、基本的には在園児とは別の空間で特に交わることなく過ごしています。お誕生会や運動会、おゆうぎ会などのイベントには関わることなく過ごしていますが、秋まつりなどの保護者と一緒に参加できる催しには参加されたいと思う子もいますね。

◆やってみてよかったですか？

子どもたちの発達支援や子育て支援の意味では、やってよかったと思います。子育てに苦労している家庭が多い中で、そういう方たちの支えになっている部分もあり、「(自分が)病院に行けてよかったです」という声もいただきました。あまり知られてないところでは、『子ども食堂の実施』も義務付けられており、毎月一回土曜日にお昼ご飯(園の献立と同じもの)を提供しています。利用者は現在卒園児のみですが、園の魅力の向上に繋がっていると思います。

◆課題はありますか？

運営的な面と言うと、この事業を始めるにあたり新たに職員を採用しました。保育士約2名分の補助をもらえますが、せめて3名は必要ですね。配置基準の2名のみでは職員が疲弊

しますし、既存の職員の力を借りながら運営しています。また、制度の自身の面では、現在国が考えている誰でも通園制度では、『月10時間』という利用時間が想定されているようです。子どもの発達の観点や、保護者のメリツトの観点から、利用できる時間はもっと長い方がいいと思います。

◆取材を終えて

取材者の私自身、こういうモデル事業をやっているのは知っていましたが、具体的にどういうものなのかは調べるまで全くわかりませんでした。国が進める『こども誰でも通園制度』に先駆けて、全国の40か所ほどでモデル事業を行っています。内容はそれぞれ独自のものになっています。福岡市でも、リトルワールドあゆみ保育園(中央区)、南片江保育園(城南区)でも同モデル事業が行われていますが、それぞれに独自色を出して実施しています。国の動向に対する視点と、目の前の子どもや保護者に対する視点の両方が、保育園の運営に必要な要素であると、春田園長のお話を聞きながら教えていただきました。今後とも『定期的な預かり保育事業』の動向を追っていきたいと思います。

(機関紙編集委員 古賀圭一郎)



令和5年度就職フェアを開催しました

福岡市保育協会では今年度も、第1回を6月18日（日）・第2回を9月16日（土）の2回に渡り、福岡市保育協会就職フェアを、アクロス福岡のイベントホールにて開催しました。この事業は、福岡市の保育園の魅力を広くアピールする場として、「保育の魅力・保育現場で働く楽しさ、やりがい」をより多くの参加者に伝えていくことで、「福岡市で一人でも多く保育に携わっていただきたい」という趣旨のもとに、福岡市から正式な後援を受けている事業です。申し込みの園が合計で109ヶ園もあり、抽選が必要となりました。お陰様で両日ともに盛況のうちに終了することができ、各回の参加者へのアンケートの結果から以下のことが考えられました。次回の参考にさせていただければと思います。

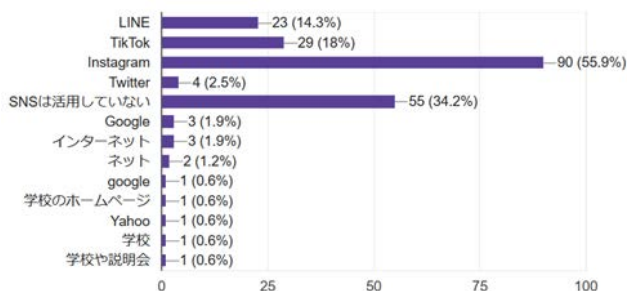
参加者数 ・第1回208名（保育士183名・栄養士25名） ・第2回134名（保育士110名・栄養士24名）

参加者のおおよそ4割が7か所以上を回られていました。ブースを回る時間だけでも2時間30分以上費やし、熱心に園の話や話を聞かれたり、質問をされたりする姿が見られました。各園で、園のホームページに飛ぶQRコードを大きく貼り出されていたり、タブレット端末で園の様子を流されていたり、子どもたちが作成した制作物を装飾にあてられたりなど、求職者の興味を促す様々な工夫の効果が大きかったのではないかと考えられます。

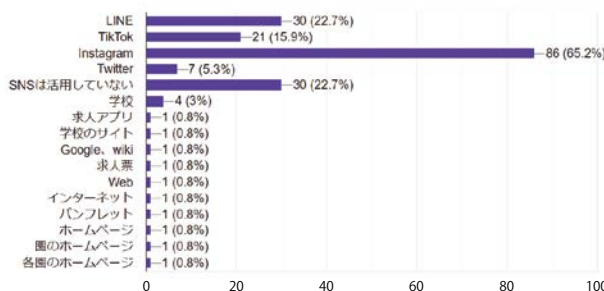
第1回	10以上	9か所	8か所	7か所	6か所	5か所	4か所	3か所	2か所	1か所
	2人	0人	5人	66人	12人	31人	2人	37人	3人	3人
第2回	8か所	7か所	6か所	5か所	4か所	3か所	2か所	1か所		
	3人	61人	5人	26人	3人	32人	0人	2人		

就職において活用されているツールについて「Instagram」が55%～65%程と圧倒的多数でした。次いで「SNSは活用していない」が20%～30%でしたが、「LINE」「TikTok」がほぼ同程度の15%～20%程という結果となりました。園の情報発信においてもSNSの活用が有効になってきているということが考えられます。

第1回



第2回



第1回・第2回ともに参加者が気になることは保育方針・処遇（給与等）・人間関係の3つがほぼ横並びでした。就職後のミスマッチを少しでも抑えるためにも丁寧な説明を求められていると思います。

第1回	1.保育方針	46人
	2.処遇（給与等）	38人
	3.人間関係	40人
	4.周辺環境	3人
	5.子育てしながらの仕事	1人
	6.ICT化について	1人
	7.ピアノ	1人
	8.食育について	1人
	9.仕事内容	1人

第2回	1.保育方針	50人
	2.人間関係	50人
	3.処遇（給与等）	36人
	4.周辺環境	5人
	5.自分の時間がどれだけとれるか	1人
	6.交通手段	2人
	7.給食を作る数	1人

参加園からの話を聞くと「自園の方針などを職員が説明できるようになる機会」として、職員の質の向上に役立てられる目的を持って参加する園もありました。就職フェアに参加することで各園の質の向上が図られ、それが福岡市内の保育の魅力向上にもつながっていくのではないかと感じ、参加する意義を改めて実感しました。

次回の就職フェアの日程は以下の通り予定されています。

・第1回：令和6年6月15日（土） ・第2回：令和6年8月17日（土）
会場：アクロス福岡 イベントホール

Survive the times
福岡市保育協会
青年部の取り組み

福岡市保育協会青年部（以下、青年部）は、今年度で創立38年を迎え、会員数32名で活動しています。会員の資質向上、福岡市保育協会（以下、保育協会）の更なる発展に貢献することを目的とし、研修や全国の団体が主催する大会への参加などを通して研鑽を積んでいます。今回はそのような青年部の活動について、皆さまにご紹介したいと思います。

青年部では毎期スローガンを掲げて、年間の研修や活動の指針としています。今期のスローガンは「Survive the times」です。日本語訳すると「時代を生き抜く」。AI技術の急速な発達や、Chat GPTの誕生など、目まぐるしく変わる社会情勢の中で、子どもを取り巻く環境においても、新たにこども家庭庁が発足し、「こどもまんなか社会」実現のために、「こども大綱の策定・推進、こども基本法が施行されました。社会全体で子育てについての考え方を大きく転換しようとしているこの時期に、子どもの最善の利益を守る存在である保育園・こども園に何が求められているのか、知見を深めていこうという思いが込められています。

青年部は大きく分けて二つの活動を行っています。一つ目は、会員の資質向上に資する研修活動です。大きな特徴は、受講する会員自らが研修の準備を行う点にあります。会員を大きく5

つのグループに分けて、年間5回の研修のうち、1回ずつ担当しています。グループ内で意見を出し合い、研修内容の検討や講師の選定を行います。制約はありませんので、保育の内容や、保育制度についての内容、園の運営についての内容など、テーマは多岐にわたります。過去の研修では、新型コロナウイルスについて各園の対応策を話しあう研修を行ったたり、「ららぽーと福岡」が開業したときには、「キッズニア福岡」を見学したりするなどの研修を行いました。また、年間1回は、他都市視察研修として県外の保育園・こども園等を見学する研修を行っています。

今年度は11月に東京を訪れ、都内の保育園の視察を行いました。さらに、約250の企業がブース出展し、保育に関連する商品の展示を行う「保育博2023」にも参加しました。参加者は各自でセミナーを受講したり、玩具やICT商材、食育キットなど様々な分野の商品を取り扱うブースを回ったりしながら、自園で行う保育についてヒントを得ることができました。

次に二つ目の活動は、保育協会の活動における後方支援活動です。毎年恒例のイベントである保育協会主催の「就職フェア」では、前日までの準備から当日の運営、事後のアンケート結果の調査・報告等、広報調査部の先生方と協力して行っております。また、今年度開催された「九州保育三団体研究大会 福岡市大会」においても、多くの会員が係員として参加しました。さらには、機関紙編集委員や人材育成会議、企画委員等のメンバーにも毎年青年部から数名選出されており、微力な

からもお手伝いをさせていただいております。こうした保育協会内の活動に参加することで、保育協会の更なる発展に貢献するという目的を果たすだけではなく、会員個人の資質向上にもつながっていると感じます。もちろん会員各々は、日常の業務に加えて協会の業務を行うことになりましたので、業務量も必然的に増えることにはなりますが、若手の立場から協会の活動に参加することは、何ごとにも代えがたい経験だと感じています。保育協会内の様々な立場の諸先輩方と企画・運営を行っていくことで、調整力やコミュニケーション力が高められ、ひいては自園での業務にも役立つと思います。

ここまで、青年部の活動内容についてご紹介しました。もちろんご紹介した研修や協会の活動への参加以外にも、全国私立保育連盟や、日本保育協会の青年部が主催する、全国大会にも参加しています。会員は市内の保育園関係者のみならず、市外・県外の保育園関係者とも情報交換を行える環境にあります。少し堅苦しい言い方をしていますが、その実「保護者参加行事は復活した？」や、「職員採用どうしてる？」など、相談し合える場になっています。時には真剣な研修の場で、時にはお酒を酌み交わしながら、同年代ならではのざっくばらんな雰囲気の中で、保育園・保育業界の話をしています。この雰囲気こそ、他の団体にはない青年部の良さだと自負しています。

さて、冒頭で述べた通り、青年部は今年度創立38年を迎えました。2年後の令和7年度には創立40周年の記念すべき節目を迎えることとなり、同年には記念式典の実施も予定されています。多くの先輩方が紡いできてくださった青年部の歴史を、次代の保育者である後輩たちにもつないでいけるような式典にしたいと考えています。

最後になりますが、今後とも青年部活動に関しまして、これまで以上のご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

※青年部では、これからの保育を語る仲間を募集しています。45歳以下の次世代の園運営を担う先生、是非とも入会お待ちしております！ご希望される方は保育協会事務局までご連絡ください。

（機関紙編集委員 高山拓人）



▲他都市視察研修の様子



▼就職フェア準備の様子

保育研究大会のみどころ

今年の発表は、博多区・中央区・早良区・西区・全国大会発表チームと公立グループの6グループの発表です。

【博多区グループ】研究テーマ：「保育園での食物アレルギー緊急時対応」

リーダー：清水博多駅東保育園 濱田 鮎美 / 講師：福岡大学医学部 宮城 由美子氏・松本 裕佳里氏・藤原 悠香氏

今回博多区では、「保育園での食物アレルギーの緊急時対応」というテーマのもと、研究員が学習し、さらに各園に持ち帰り自園でのマニュアル作成や実践研修を行い全職員が緊急時対応を身に付けていくことを目的とし、2年間の研究を重ねて参りました。

- ①現状の把握
(各園における食物アレルギーに係る現状のアンケート調査や対応事例の調査)
- ②講師による講義、実践演習
(食物アレルギーの基礎知識や実践研修の体験)
(エビペンの使い方、エビペントレーナーを用いた実技練習等)
- ③各保育園での食物アレルギー対応力向上のための取り組み

(各園での緊急時対応力向上のための取り組みの計画、実践)

- ④各保育園での取り組みの共有
(マニュアル作成整備やシミュレーション研修を行っているの学びや課題の共有)
- 参集での研修を終え、現在はこれまでの研修や各園での取り組みをまとめ、資料に掲載する原稿の作成中です。

保育士会の皆さんに今回の研修での取り組みが分かりやすくお伝え出来る様に頑張ります。当日はどうぞよろしくお願い致します。



【中央区グループ】研究テーマ：「保育が楽しくなる自己評価～自己評価ガイドラインを踏まえ保育の質を高めよう～」

リーダー：くすみ保育園 草場 直子 / 講師：西南学院大学 人間科学部 細川 美幸氏

2020年に、保育所における自己評価ガイドラインが改定された内容の中に、「保育の各現場における保育内容等の評価に関する取り組みが、より保育の改善や組織としての機能強化に実効性のあるものになること」に資するよう、また、「自己評価ガイドラインを十分に活用し、自己評価の取り組みを進め、保育の改善、充実を図ると共に、一人一人の保育士等の資質、専門性や職員間の協働性をより高めていくことがもためられている」と記してあります。しかしながら、保育

現場の現実と重ねた時に、自園はできているのか？他園はどうやって取り組んでいるのだろうか？と様々な疑問が浮かんできたところから、どうすれば評価に関する取り組みの本来の目的を持って保育を行えるのか？ガイドラインの中の楽しくなる保育とは何か？自己評価とは？についてたくさんの討議を行って来ました。私たちなりに考えた、「自己評価の大切さとは何か」「保育が楽しくなる実践方法」を2月の保育研究大会で発表できることを楽しみにしています。

【早良区グループ】研究テーマ：『子どもがよりよく生きるためにできること』～子どもの背景にも目をむけた保護者、保育士の関わり～

リーダー：くまのご保育園 田崎 真理子 / 講師：子どもの学び館 代表取締役 福永 宅司氏

『有限会社子どもの学び館代表取締役』でもあり「NPO法人みんなの学び館顧問」の福永宅司氏に、助言をいただき2年間研究してきました。まず現状を知るところから始めようということで、子どもたちを見ていて保護者に聞いてみたいことを研究員で出し合いアンケートの設問を考えました。

思いが溢れすぎて3ページにも亘るアンケートにもかかわらず、8割近くの(79.6%)保護者の方が回答してくれたことに感謝！戻ってき

たアンケートの集計(578世帯分)は膨大すぎて定例会だけでは全てが集計できない事態になりましたが、自由記述に保護者の方の溢れる思いや、こちらが当たり前になっている、お迎え時に今日あったことをお伝えすることが、実は保護者にとって嬉しくありがたいことだということが再認識できました。

さて貴重なデータは揃いました。子どものそばにいる保育士目線でここからのまとめを行っています。あとは発表をお待ちください。



【西区グループ】研究テーマ：「幼児期における運動遊びの重要性」～発達に応じた運動が幼児の心身に与える効果を知る～

リーダー：和光保育園 高木 理恵 / 講師：中村学園大学 教育学部 西田 明史氏

近年、子どもの体力の低下が問題になっています。安全に遊べる場所の減少、集団で遊ぶ機会がない、習い事などで遊ぶ時間に余裕がないなど要因は様々ですが、幼児期は必要な運動能力を獲得する最も重要な時期です。適切な運動の経験ができるように、心身の健やかな育ちにつながるような運動遊びを考え、実践できるようにしたいという思いから本テーマを設定しました。

まずは、アンケート調査を行い、各保育園での運動遊びの実態や保育士の先生たちが抱えている運動遊びの課題や悩みをまとめてみました。その中で、「遊びの種類を増やしたい」「成長に合った遊びを知りたい」という意見が

あり、講師の先生から助言をいただきながら、遊びを“作る”ことから始めました。その遊びで子どもたちが身につけることができることは何かを実践を通して意見交換を行いました。また、各保育園の運動遊びのエピソードを事例として挙げ、遊びの中から子どもの“学び”と“育ち”を読み取り、単発的な遊びで終わるのではなく、連続的に遊びが繋がっていくための保育者の働きかけについて話し合いました。

研究大会では、研究員の先生方と考えた運動遊びや、エピソードから見える子どもの育ちについて討議した内容を中心に発表したいと思います。



【全国大会発表チーム】研究テーマ：「子どもの健やかな幸せを願う保護者と保育者の意識・理解のズレに対する保育者の意識の変容にむけて」

リーダー：こじか保育園 嶋村 尚美

令和5年10月、静岡県浜松市で開催された全国保育士会研究大会第6分科会にて、3年間の研究結果を発表しました。分科会テーマは「保育所・認定こども園等における保護者支援」でした。

保育所における保護者支援や保育相談場面、保育者と保護者との間にしばしば生じる誤解やズレ。そのズレが生じるメカニズム。そして、ズレを縮めるための保育者の手立てや必要な意識について研究し

ました。
子どもが幸せであるために保育者は保護者にどう寄り添えばよいのでしょうか。ズレの原因や背景を探り、保護者支援を行った結果、保護者と保育者の認識のズレを縮めることができたと考えられる事例をご紹介します。また、「保護者支援における保育士の意識調査」から見えてきた保護者支援で悩んだ時の解決方法についてもお話します。

私の園の取り組み

しかた保育園 下窪 純子

私たちの保育園では自然体験ができる園外保育を多く取り入れています。地域の方々のご協力もあり、じゃがいもや人参、とうもろこしの収穫や芋掘りなど子どもたちが沢山の経験ができるよう計画をしています。

徒歩で行ける距離もあれば、貸切バスで遠出をする時もあり、じゃがいも掘りでは糸島市へ行きました。じゃがいも収穫後は徒歩で行ける近くの海でも遊ぶことができました。友だちと一緒に来た海に大喜びの子どもたち。波をジャンプしたり、砂浜の砂に触れたり、海水のしょっぱさを味わうなど思い切り海を楽しみました。実際に触れて分かること、体験してみていることなど本物の自然体験をすることを目指しています。また体を思い切り動かすこと、友だちと一緒に体験をすることで気づくことも沢山あります。子どもたちが豊かな自然体験を通して食育だけでなく、探究心、想像力、体を動かす楽しみが身につくように園全体で考え工夫しながら保育を行っています。

また、職員へのいろいろな取り組みも行っています。そのいくつかをご紹介します。職員会議を夜に行っていたが昼間に行うようにする。保育士が自由に一日を使えるフリーの日を取り入れる。職員ひとりひとりがリフレッシュ休暇を取る。などです。

書類や保護者のおたより帳、クラスだよりや園だよりなどのICT化も進めてきました。ICTを活用し保育士の負担軽減を行いながら保育の質向上を目指し、園内研修などを通して子どもたち、保護者、保育士にとって何が一番良いのかをみんなで考え、よりよい保育園作りができるよう取り組んでいます。



長住保育園 古川 保宏

あけましておめでとうございます。今年も何卒よろしくお願い申し上げます。

昭和52年に福岡市少年文化会館で開催された「たんぼぼ音楽研究会」は以来、紆余曲折を経て今年も博多区のサンパレスで1月28日に開催されます。私たちの園では、この発表会を年間行事の一つとして捉え参加してまいりました。今日まで続けて来たのは子どもたちと職員が目的に向かって頑張った達成感を共有し、保護者と共に子どもたちの健やかな成長を実感し確認できる良い機会になると考えているためです。

一方、近年の保育を取り巻く社会の意識や環境は当時に比べ大きく変化しており、特にコロナ禍後は激変と呼ぶべき状況です。ここに至った要因は多々あると思われませんが、それらが織りなす複合作用により厳しい現実の数々に晒される毎が続いています。更に私たちにとって最も大きな問題である慢性的な職員不足解消に向けての求人には応募が無く、人手不足の中での保育の質の担保など多くのストレスを抱えて苦悩する日々が続いています。余裕を失った雰

囲気は環境に敏感な子どもたちにも伝わる可能性があり、子どもたちに不安を感じさせることは極力避けなければなりません。

この八方塞がりの状態を回避するための特効薬は見当たらず、個人の努力ではどうにもなりません。このような状況を改善し良い方に向かうにはどうすれば良いのでしょうか…?

今、巷間では働き方改革が叫ばれ、こども誰でも通園制度の実施に向けて調整が進められていますが、その制度の根幹を支えるのが我々だと思います。しかし現在の私たちの働き方や賃金、休暇を含めた環境は十分な検討や整備、改善がなされぬままこの制度が実施されるのではと危惧しています。私たちも私たち自身で我々を取り巻く環境を見直し、制度にとって本当に必要なものを見直してみるべきだと考えています。一筋縄では行かない種々の難題を抱えながら歩む道は険しくゴールは遙か彼方です。子どもたちを慈しみ、保育士をはじめ保育園で働く人だれもが希望に満ち溢れ充実した毎日を過ごせるように、皆で手を取り合って一歩ずつ着実に前向きな気持ちで取り組んでいきたいと思ひます。

編集後記

明けましておめでとうございます。昨年はJリーグ・アビスパ福岡のルヴァン・カップ初優勝で盛り上がりました。福岡は日本でも特出して成長が続いているパワーあふれる若い都市です。アビスパの優勝は本当に誇らしく元気をもらいました。

保育園では、大変だったコロナ禍も一段落し、夏祭りや運動会、遠足などの行事を開催することができました。子どもたちの笑顔に包まれた普通の生活、そのすばらしさを再認識できました。

福岡市の保育園界隈では、昨年の最大イベントは九州保育三団体研究大会福岡市大会の開催でした。自分も第6分科会に参加し、充実した実践発表と意見交換で新たな気づきがあり充実した時間を過ごしました。交流会も参加者どうしの会話がはずみ、そして大好きな森口博子さんのナマ歌を聞かせて頂き感動しました。ご準備された多くの皆様、ありがとうございました。

さて、保育園の喫緊の課題は保育士さん不足だと感じます。本号では、次世代を担う皆様に保育の魅力をPRする試みを紹介しています。「こども誰でも通園制度」については、大きなニーズがありますが、保育園の負担が増えない安心できる形で進められるよう願っております。

辰年はおめでたい年と言われています。保育に関わる全ての方々に取りまして、今年がより良い年となりますように祈念申し上げます。

(機関紙編集委員 加藤信裕)

～感想やご意見はこちらにお送りください～

【保育協会メールアドレス】kyoukai@hoiku.or.jp